




今回ご紹介する中村勘三郎さんの私邸は、先代の頃から慣れ親しんだ地、閑静な住宅街の高台にあります。そして中村勘三郎夫人の波野好江さんが、このたび新装した稽古場に生まれて間もない初孫の七緒八くんともにご登場くださいました。ここは多くの感動を生んできた勘三郎さんが、その礎を築いてきた場所。伝統芸能を生業とする一家にとって、家が出来たす役割について歌舞伎役者の日常に寄り添う好江夫人に伺いました。

# 中村勘三郎邸・誌上初公開 歌舞伎役者の 住まう家

撮影／篠山紀信  
△ア／谷口愛子 △イウ／村上智子 構成・文／山下シオン



「わが家のリビング・ダイニングは  
お正月のときなどに  
中村屋一門が集う場所でもあります。  
全員が勢揃いしても、  
みんながゆったりと、心地よく過ごせる  
空間にするために、優しい光を通す  
カーテンにもこだわりました」

黒を基調としたキャビネットやソファなどの家具は、以前から愛用しているもの。新築した家でも同じものがセッティングできるようにと、好江夫人はシンプルな内装をオーダーした。今回新調したカーテンはこれらの既存の家具にコーディネートしたもの。レース素材のものと黒生地チェックのパターンがデザインされたものとの組み合わせが、モダンなインテリアとして部屋に溶け込んでいる。



カーテンは、自分の好みやスタイル、サイズなどを選んで購入できるオーダーカーテン専門店「モンルーベ」が施工を担当。繊細なレースカーテンはドイツのブランド「WOLFEL社」の生地を選んだ。家で洗濯できる扱いやすさだけでなく、ページュのリボンをあしらったディテールの表現がお洒落で人気。

◎モンルーベ 東京ショールーム ◎東京都港区南青山4-1-8  
麗雲ビル1階 ☎0120-048-016 <http://www.monreve-japan.jp>



稽古場の所作板は、好江夫人の強い意向で先代の勘三郎邸で使用していたものをそのまま使用。まさに親子三代の汗と涙のしみ込んだ芸の継承を見守ってきた存在だ。孫の七緒八くんがこの場所で稽古する日も近い。



波野家のこれまでの歩みのすべてを辿ることができる写真の数々が飾られているキャビネット。いちばん上の右に飾られている写真は、勘太郎さんと七之助さんの子どもの頃にこの家を篠山紀信氏が撮影したものの。

## 好江夫人が導いた 家のあり方、 家族のかたち

中村勘三郎邸は、先代の頃から地名にちなんで、小日向の家と呼ばれています。当代とその夫人である好江さんは、両親の亡き後も守ってきた同じ地に、四世帯住宅を建てました。四世帯とは、勘三郎さん夫妻、姉である波乃久里子さん、勘太郎さん夫妻、七之助さんのこと。離れていた勘太郎さんも結婚を機に戻り、一家が再び小日向に集結したのです。

「家族全員でここに住むことを決断したのは、私です。一緒に住むといっても一つ屋根の下ではなく、それぞれにちゃんと玄関がある四軒長屋のような感じですね。もしお塩がないと思ったら、お隣に貸してもらえるのがとても便利なんですけれど、お互いのプライバシーは必ず守るという決めごとだけはしていて、この距離感を保つことが大切です」

そう語る好江夫人が今回の新築でこだわったのは、中村屋の歴史を物語る旧邸で使用していた稽古場の所作板を残すことと二門が集える空間をつくること。そして四五、六年という歳月を経た所作板を敷いた稽古場と日当たりのよいリビング・ダイニングが完成しました。

「七緒八も歩けるようになれば、稽古が始められますので、近い将来にこの稽古場に立つでしょうし、来年のお正月は一堂に会してお屠蘇をいただくことができます。ここは、そのための場所です」

歌舞伎役者にとって、家とは、芸の継承の場であると同時に、家族のように人と人が繋がる場でもあり、そこには深い絆が存在します。この家こそ中村屋そのものを象徴しているのです。